

## 『ボルヘス伝』の翻訳を終えて

平野幸彦

小生去年の夏、初めて単独で翻訳書（ジェイムズ・ウッダグ著『ボルヘス伝』白水社刊）を上梓したところ、そのことをお知りになった高橋（正）先生と秋先生から、英文学会誌のために、翻訳苦勞話のようなものを一筆書いてみないかとお誘いを受けました。たかが単行本1冊訳しただけで翻訳論をぶつのはおこがましいのですが、かと言ってせっかくのお勧めをお断りするの忍びなく、こうしてペンをとった次第です。

まず参考までに、本訳書の成立過程を簡単に記しておきましょう。

この仕事の話を書者に持ちかけたのは、大学院時代の恩師でした。たしか1997年の後半のことだったと記憶します。それから原書を通読し、企画書（概要と翻訳出版の意義をまとめたもの）を作成。その後、版元での編集会議、版權取得を経て、初稿作成に着手したのは翌年の1月。本業の傍らの仕事だったとはいえ、これが思いのほか時間がかかり、すべての原稿を編集者に渡し終えたときには2000年5月になっていました。しかもその後、今度は版元の都合でしばらく間があき、校正作業が始まったのはおととしの年末。そしてやっと昨夏の発刊にいたりました。

このように、初稿をひととおり仕上げるだけでもずいぶん時間がかかったわけですが、省みるに、そのおもな原因は、小生が「翻訳の技法」なるものをそれまで体系的に学んだことがなかった点にあったようです。大学の英語教師の端くれとして、いわゆる英文解釈の経験は人並み以上に積んでいたし、それなりに自信もあったので、あまり深く考えずに、比較的軽い気持ちで引き受けたのですが、実際に訳しはじめてほどなく、大きな誤算に気がついた。いまから

思えばごく当たり前のことなのですが、翻訳には英文解釈だけでは十分でない。もちろん文法的に正しく読むことができなければ話になりませんが、専門家向けでない、広く一般読者を対象にした訳文を作るさいには、英文解釈のレベルを超えた知識やテクニックが不可欠なのです。

本稿ではそれらのうち、実際に翻訳を行なってみて、その有効性を実感できたティップスをいくつかご紹介したいと思います。もっとも昨今また出版されている翻訳のハウツー本をひもとけばきっとどこかに書いてあるし、ベテランの方にとってはいまさら言わずもがなのことばかりなのですが、その点はご容赦ください。

#### (1) 前から順に訳す

これは逆から言えば、無理に後ろから返って訳さないということです。修飾することばが修飾されることばのあとに来るとき（英文ではよくあるパターンです）、いわゆる受験英語が骨の髄まで染みついていられるわれわれは、まず後置された修飾語句を訳し、ついで被修飾語句に取りかかるといった手順を踏みがちです。しかしこのやり方だと、修飾語句が長大な場合、おうおうにして、何が何にかかっているのか、判然としない日本語を生み出す結果になりかねません。それよりは、原文の配列どおり被修飾語句から訳して、それが終わったらいったん切る（句点で文を終えてしまっても、読点でつなげてかまいません）。それから修飾語句を日本語に直すという順番にしたほうがよい。たとえば主節の後ろに従属節が来る場合は、まず主節を訳してしまう。そして適当なつながりことばでつないでから従属節の中身を訳すといった具合に<sup>11)</sup>。関係詞節の場合も同様です。短くて、先行詞の前に持ってきて訳したほうが簡潔でわかりやすい日本語になるのを無理にあとにまわす必要はもちろんありませんが、ある程度の長さがあるのなら、直前で切り、新たに独立した文として訳したほうが意味が通りやすくなるかどうか、検討してみるべきでしょう<sup>12)</sup>。

## (2) 代名詞を直訳しすぎない

これはとくに人称代名詞の場合に言えることなのですが、英文に出てくる代名詞をぜんぶ文字どおりに訳出すると、およそ自然とは言えない日本語になってしまいます。日本語は英語とちがいで、主語すら明示せずすませられる言語。まして（英語では必須の）所有代名詞までいちいち訳出していたら、とてもうるさい印象を与える文章になってしまうのです。その弊を避けるため、文意が不明瞭にならないかぎり、所有代名詞は極力カットする。主語や目的語の場合も、前後の文脈から誤解のおそれがなければ省いてしまうか、それが指している具体的な名詞（またはその言い換え）で置き換えるようにします。

## (3) 名詞中心の英文を動詞中心に訳す

英語は名詞を核にして文を組み立てるのに対し、日本語の文は動詞中心であるといった指摘を耳にしたことがおありでしょう。これはそのような言語的特徴のちがいから導き出されるティップスです。いちばん単純な例を挙げれば、“He is a good cook.”という英文を「彼は上手に料理する」と訳したり（もっともこの例の場合、「彼は料理がうまい」としたほうがより自然な日本語でしょうが），“with a little help from my friend”という句を「友人に少々手伝ってもらって」という具合にあたかも節のごとく訳すわけです。名詞を動詞的に捉え直すにともない、形容詞は副詞のように扱うことになる点にご注意ください。

## (4) 文末に変化をつける

伝記にかぎらず、一般に物語の文章は、過去を振りかえる視点から綴られています。そのような英文を日本語に訳すとき、動詞が過去形だからといって機械的に「……だった。……だった」としてしまうと、特別な効果を狙ってあえてそうする場合はともかく、たいていは単調で生硬な訳文になってしまいます。日本語には厳密に言うとき制の概念は存在しないといった説をどこかで聞いた

記憶がありますが、英語の原文で過去形が用いられているからといって、必ずしも「……した」「……だった」と訳すにはおよびません。歴史的現在のように訳したり、体言止めを使ったりして、文末に変化をつけるようにすべきです。とりわけ時制の一致が起こっている従属節中の動詞を訳すさいには、この点に留意する必要があります。

以上、筆者がこのたびの経験で有効性を確認できた翻訳のヒントを、きわめて単純化された形ながら、いくつか挙げてみました。じつはそれらはすべて、根底にある理念の点で共通しています。その理念とはすなわち、原文を文法的に正しく理解することが翻訳の大前提だが、それを成し遂げたら、いったん原文から目を離し、自分の作った訳文が日本語として自然な表現になっているかどうかを、とことんまで吟味する必要がある。そして自然な日本語にするためには、原意を損ねないかぎり、直訳主義にとらわれることなく柔軟に対応すべきだ、ということにほかなりません。

つまり翻訳においては、英語の山を登りつめたからといってゴールではない。その先には日本語のさらなる高峰が待ちかまえているのです。しかも頂上にある道は（途中で行き止まりになっているものも含め）無数にあるので、訳者は試行錯誤を余儀なくされる——翻訳とは、この一連のプロセスを、個々の文のレベル、段落のレベル、節や章のレベル、そして書物全体のレベルのすべてにおいて反復することなのです。今回の仕事でもっとも痛感させられたのは、じつはこの至極当たり前の事実だったかもしれません<sup>93</sup>。

## 注

- (1) 従属接続詞の訳し方について — 因果関係を表わす because などは辞書の訳語どおりでかまいませんが、時の前後関係を表わす接続詞の場合、たとえば before ならば「その後」といった具合に読み替えてやります。
- (2) またこれとは逆に、2つの短い文を1つの文にまとめたり、短いほうの文を節にして、長いほうの文に組みこんでしまうといったやり方もあります。このことからわかるように、筆者は、つねに前から順に訳さなければならないと主張しているわけではありません。むしろ、まずは原文の構造を尊重すべきで、とくにそのような構造をとることに何らかの意味があり、それを温存したまま訳しても自然な日本語として許容できる範囲に収まるならば、下手にいじらないほうがよい。文の構造を改変するのは、そうでない場合にとどめるべきだと考えています。
- (3) 本稿ではもっぱらことばのレベルの問題に焦点を絞りましたが、訳文の作成には、言うまでもなく内容面の問題もかかわってきます。訳者には語学的知識のほか、一般常識や専門知識が要求され、不足があれば事典や地図その他の参考書に当たらなければなりません。また引用文などは、前後の文脈を念頭に置いて訳さないと思わぬ勘違いを犯すおそれがあるので、できるかぎり出典を直接参照するようにします。繰り返しになりますが、英語が読めるからといって、それだけで翻訳者になれるわけではないのです。